

巻頭言

第74回日本放射線技術学会総会 学術大会を開催して

第74回日本放射線技術学会総会学術大会 大会長
天理よろづ相談所病院

錦 成郎



錦 成郎 先生

1. はじめに

JRC2018は、2018年4月12日(木)から15日(日)の4日間、パシフィコ横浜を中心にして開催いたしました。開催テーマは、「Innovative Sciences and Humanism in Radiology」、日本語では「夢のような創造科学と人にやさしい放射線医学」としました。合同実行委員会のメンバーは、第77回日本医学放射線学会総会 今井裕会長、第115回日本医学物理学学会学術大会 小口宏大会長、日本画像医療システム工業会 小松研一会長、そして、第74回日本放射線技術学会総会学術大会大会長の錦成郎が務めました。今年は思いのほか桜の開花が早くて横浜では咲き誇る姿を見ることができませんでしたが、その代わりに「つつじ」が咲き始めていたことが印象的でした。最終日の早朝は嵐となり来場される方々にはご不便をかけることとなりましたが、それはそれで印象に残る大会になったのではと考えています。最終的なJSRTの参加登録者は4,728名で、ITEM2018の総入場者数は22,220名となったようです。小松会長の弁を借用すると、今年のJRC2017

より若干少なかったが、ECRを少し上まわる人数となったようです。

2. 大会テーマへの想い

Innovationとは、それまでのモノ・仕組みなどに対して全く新しい技術や考え方を取り入れ、新たな価値を生み出して社会的に大きな変化を起こすことであるといわれています。また、Innovationには distraction という意味も含まれているため注意深く扱う必要のある言葉であると考えています。

現代はネットワーク時代といわれて久しいですが、日常生活にもAI(Artificial Intelligence)を搭載したIoT家電が実際に使われるようになり、今まで想像できなかった便利な技術が身近になる時代へと変化しています。早くも企業の中には人の活動を支援するロボットを導入する動きがあると報じられるまでになり、間もなく医療界にも同様な波が押し寄せてくるものと想像します。この支援技術こそ、まさしく我々の研究分野であり、この領域で社会に役立つインパクトのある研究成果を示すためにも、こ



Fig.1 テープカット



Fig.2 展示会場島津ブース

れまで以上に邁進することが求められていると感じます。このような大きな変革の波に晒される時代に、最も重要なキーワードであるとともに、今後の方向性を担う軸に置くべき考え方は「Who's innovation for?」であると確信しています。医療のみならず人のための技術革新であることが重要であり、最終判断は「人」が行うシステム設計も選択範囲に入れて、成熟させていくことが重要であると考えます。これからを見据えて「人にやさしい放射線医学」について議論する契機となる学術大会であったと感じていただけたら大変うれしく思います。

3. 国際化の継続

当学会は放射線関連の国際会議においてJRCが、RSNA, ECRに並ぶアジア地域の第3極となれるように努力していきたいと考えています。今回はOverseas Visitors Conferenceと題して、国際戦略委員会が中心となって海外からの参加者とJSRT会員が交流できるプログラムを開催しました。土井邦雄名誉顧問のRPT誌の紹介から始まり、海外から、Chinese Society of Imaging Technology (CSIT), Korean Society of Radiological Science (KSRS), Thai Medical Physicist Society (TMPS), Taiwan Society of Radiological Technologists (TWSRT), Malaysian Institute of Physics (MIP)の代表者がミニ講演を行いました。その他にも海外学会への派遣会員の発表も4名行われ参加者からは好評でした。



Fig.3 Overseas Visitors Conference

4. 合同企画・合同シンポジウム

今回の合同特別講演は、2002年にノーベル化学賞を受賞された(株)島津製作所 田中耕一先生をお迎えして、「分析と医用の融合によるヘルスケア

への新展開のために」と題した講演をお願いしました。分析機器の開発という我々とは少し距離のあるように感じていた研究分野が、今後は医療の常識を変えるような事業展開に結びつくというお話を受けて、まさしく医工連携の重要性を再認識した大変興味深いご講演でした。合同特別講演に先行して行われた合同開会式では、初めての試みとして「Honorary Member Award Ceremony」が合同で行われ、当学会からは、小寺吉衛先生、真田茂先生が名誉会員に推戴されることがお披露目されました。おめでとうございます。合同シンポジウムは「医療被ばく低減に向けての取り組み」、「本質に迫る研究をしよう！：前臨床研究へのお誘い」、「放射線診療におけるRadiomics研究の現状」を開催するとともに、新たな試みとして合同教育セッション「前立腺癌の診断から治療まで」を開催したところ大変盛況でした。今後の継続も前向きに検討していただければ幸いです。当学会が担当した「本質に迫る研究をしよう！：前臨床研究へのお誘い」の招待講演では、光免疫療法の開発で世界中から注目されている米国国立衛生研究所主任研究員の小林久隆先生をお招きしました。とてもインパクトのある講演で今後のさらなるご活躍に期待したいと思います。また、JSMPとの合同企画である「RPT誌に論文を掲載するためのノウハウ教えます」では、当学会のRPT誌担当理事である白石順二先生の司会で、著者の立場、査読者の立場、編集者の立場で専門分野の講演をお願いしました。このような企画は初めてですが、会員の投稿意欲を高めることに少しでも貢献できれば嬉しく思います。



Fig.4 大会長講演



Fig.5 田中耕一氏特別講演



Fig.6 JSRT名誉会員



Fig.7 鏡割り

5. 学術プログラム

例年通り、宿題報告2題、瀬木賞受賞講演、RPT誌優秀論文土井賞受賞講演のほかに、海外招聘講演として、ヘリカルCTの開発者であるDr. Willi A. Kalenderに「Computed Tomography: State of the Art and Future Developments」、PETの開発者Dr. Paul Kinahanに「Initiatives to Characterize and Improve Quantitative Imaging with Positron Emission Tomography (PET)」をご講演いただきました。また、今回は学際化を進める一環として

教育委員会が主導して、日本循環器学会とのコラボレーション企画「循環器領域における放射線技術学の役割－基本的な知識に活かされる最新技術－」を開催しました。各モダリティにおける診断と技術的課題を話題提供していただきましたが、まさしく横の連携の必要性を感じられる企画であったと考えます。また、このシンポジウムではスマートフォンを使った意見集約システムを試用したところ大変有効に機能することがわかりました。さらに、医工連携シンポジウム「放射線技術の可能性を拓げる」では、放射線とは距離のある分野でご活躍の先生方に講演いただきましたが、この企画からこれからの研究の在り方、着眼点の持ち方などを感じ取っていただけたらとても幸いです。この他には、教育講演9題、専門部会プログラム9題、専門部会講座（入門編・専門編）15題、JIRAワークショップでは、無理をお願いして本年4月から施行された臨床研究法を取り上げ、実施にあたっての注意点を整理して現場で役立つ情報発信をしていただきました。フォーラムは、標準化・医療安全・放射線管理・防護の4つが開催されました。

6. 実行委員会企画

今年の英語発表支援セミナーは、研究領域を8つに分けてそれぞれの分野ごとにセミナーを企画しました。CT・（計測・防護）・MR・画像・撮影・医療情報・核医学・治療ともに統一した内容と専門に特化した内容で構成され充実していました。上記以外にも「生体機能情報の可視化と医療への貢献」、「超高磁場MRIによる脳地図作成への挑戦」、「3D printingを用いた放射線技術学における応用」、「非造影MRIによる流れの可視化：撮像法と臨床応用」、「MRIで脳内をもっと見える化してみよう！」、「放射線技術学会で発表する際に必要な研究倫理の知識」、「技術学会日本雑誌への投稿から査読への返事」の書き方、「技術学会を知ろう！」、社会人受け入れ大学院紹介①、社会人受け入れ大学院紹介②などを開催しました。特徴的な企画として、倫理の解説、JSRTの運営体制の紹介、論文投稿時のノウハウの伝授、社会人大学院の紹介などが開催され、有意義な時間を共有して頂いたものと考えます。

7. 一般発表

第74回総会学術大会の最終演題数と英語発表者数は以下になりました。

採択演題数 546 演題

(うち口述発表 510 演題, モニタ発表 36 演題)

英語発表 269 演題

(うち口述発表 265 演題, モニタ発表 4 演題)

口述発表のうち英語発表率: 52%

海外からの応募は52演題ありましたが最終的な採択数は39演題となりました。国内の英語による口述発表は目標としていた50%を超えて52%を記録しました。非常にタイトな日程で演題審査を担当いただいたプログラム委員会・演題審査を担当された先生方には紙面を借りて感謝いたしますとともに、この成果は会員の皆様方のご協力とご支援の賜物であると心から感謝申し上げます。

8.最後に

この大会を支えていただいた、実行委員の先生方、大会開催委員会、プログラム審査委員会及び倫理審査担当の先生方、企画にご尽力いただいた教育委員会、学術委員会、各専門部会、代表理事直轄委員会の先生方、JSRT事務局、JRC事務局、スクラムを組んで共に大会を運営していただいたJRS今井裕会長、JSMP小口宏大会長並びにJIARの小松研一会長、関係していただいた全ての方々に御礼申し上げます。ありがとうございました。この学術大会が益々発展することを祈念して筆をおきます。最後に、執筆の機会を与えてくださいました島津製作所の関係者の皆様に御礼申し上げます。



Fig.8 大会長招宴



Fig.9 写真左から、松浦由佳・白石順二・錦成郎・石田隆行(実行委員長)・太田誠一・林秀隆・齋藤茂芳